

## 豊後の無二齋

宮本武蔵親子のおはなし

入江 秀 利

晩秋のある日、日出町で講演会がありました。講師は大河ドラマ「武蔵」のプロデューサー古川法一郎氏で、演題は「大河ドラマ武蔵の裏話」でした。ひよっとしたら延俊の日次記ひなみきにある無二齋のことに触れられるかと思いましたが、

NHKの大河ドラマは最近ほとんど見ません。時代や主な人物は大体史実に即しているのですが、ドラマである以上、演出に脚色すればするほどリアリティーから遠ざかり、観ていてやるせなくなることが多いのです。プロデューサーも多様な層の視聴者にこた応える作品にするために苦勞があるようで、時代考証にはかなり留意しているようです。たとえば「お通たくまが（米倉涼子）遅しすぎて『吉川武蔵』のお通の印象が崩れる。ミスキャストでは」と云う投書が多かったそうです。それは時代考証の結果で、戦国の無秩序な時代では、一步山道にはいるとそこは無頼の徒の世界で、なみの女の一人旅は

到底不可能だったからだそうです。

大河ドラマ「武蔵」は吉川英治原作「宮本武蔵」を下敷きにしながら、それぞれの場面で古文書や古記録に照らし、出来るだけ史実に添ったシナリオにしたそうで、そのため新たな疑問も生じたり、また多くの史実も確かめられたそうです。勿論、古川氏は講演で、武蔵の父無二齋と日出藩主木下延俊との関係について、新しく発見された史料の『慶長十八年木下延俊日次記ひなみき』をあげて、この日記に「無二」の名前がみられることを紹介されました。

記録の中でも日記は自己を偽れないもつとも信賴がおける史料であろうと云われます。延俊日次記は二人の侍臣が書いた木下延俊の個人的な記録ですから、偽ることがないと考えられます。その他の古記録の中から、無二（無二齋・無二之助）や武蔵が豊後に記した足跡を辿たどってみようと思います。

※「慶長十八年木下延俊日次記」、初代日出領主延俊の慶長十八年の行動を二人の右筆ゆうひつが四、五日交代で書き記した日記。八十三年後（元禄九）に三代俊長が表紙をつけて表装したものの。史料としては日記類が最も信賴がかけると云われる。木下俊瀨としひろ氏の孫莊美知子氏が発見して國學院大學文学部教授二木謙一氏が解読して公表した。

一、黒田如水孝高・松井（長岡）興長・木下延俊

まず、無二齋・武蔵父子に拘りをもつ三人の大名について、それぞれ説明をしておく必要があります。

黒田如水孝高

黒田孝高は名を官兵衛と云い、信長や秀吉に仕えて播磨攻略、高松城水攻や毛利氏との講和交渉など竹中半兵衛とともに秀吉の参謀として軍功がありました。天正十五年（一五八七）、九州平定戦の論功行賞で、宇佐、中津、下毛、上毛、築城、京都の六郡十二万五千石が与えられ、中津に転封されました。

天正十七年（一五八九）嫡子の長政に家督を譲ります。その後孝高は秀吉の小田原攻めや文禄・慶長の役では軍監として朝鮮にも出兵しました。帰国後は暇を貰って中津に帰りました。

慶長五年（一六〇〇）、黒田長政は黒田軍の主力を率いて家康の上杉討伐に参加し、関ヶ原の合戦にも臨みました。

いっぽう、中津城にいた孝高（如水）は、西軍の大友義統と対峙する木付（杵築）の松井佐渡守康之に加勢するため、中津に残った黒田軍を率いて、九月九日、豊後に向いました。

途中、国東にある西軍方の城を攻め、十三日の夜実相寺山

に到着しました。このとき、如水直属の黒田軍のなかに宮本無二之助親子がいたと云われます。（丹治峰均筆記）

松井（長岡）興長

父の松井佐渡守康之は細川忠興の筆頭家老です。

丹後宮津十二万の城主だった細川忠興が、慶長五年二月、家康の取り計らいで速見郡・由布院六万石を増され、家老の松井佐渡守康之が木付城を受け取って入部します。

五月、忠興が速見郡に来て新領を巡検しているときに、家康の上杉討伐の報を聞き、木付城を康之に託してあわただしく上坂しました。

慶長五年九月、西軍についた大友義統は浜脇浦に上陸して、立石に布陣し、翌日東軍側の木付城を攻めました。康之は黒田如水の援助をえて攻城軍を撃退し、石垣原に打って出り大友軍を打ち破りました。この石垣原の合戦を「九州の関ヶ原」とも云います。

いっぽう、康之の嫡子興長（新太郎）は主君細川忠興に従って関ヶ原の合戦に臨みました。慶長五年十一月、細川氏は関ヶ原と石垣原の軍功が認められ、筑前に転じた黒田氏の旧領豊前・豊後三九万石を増され宮津から中津に転封します。

家老の松井佐渡守康之は、速見郡のうち日出の木下延俊の

領分を除く幕府領一万七千余石（別府を含む）の代官を仰せ  
つかり、同七年、無役地五千石、木付よりの出府料九百九十  
石などを加増され約二万六千石を与えられて、木付に城を構  
えました。

同年、松井興長（新太郎）は長岡式部少輔興長と改名し、  
やがて主君忠興の娘を娶り主家と血縁を結びました。

興長は「松井文庫」に収められた書状などで、無二齋に剣  
を学び、宮本武蔵のよき理解者であったことがうかがえます。

寛永九年、興長は主家細川の肥後転封に伴って肥後八代の  
城主になりました。

※ 松井家伝来の古文書、古記録、美術工芸品を保存する

#### 木下延俊

木下氏はもともと秀吉の正室おねの実家杉原氏で、延俊は  
名目上は秀吉の甥になります。妻は細川藤高の娘で、細川忠  
興とは義兄弟でした。関ヶ原の合戦では忠興とともに東軍方  
につき、姫路城の守護を命じられました。

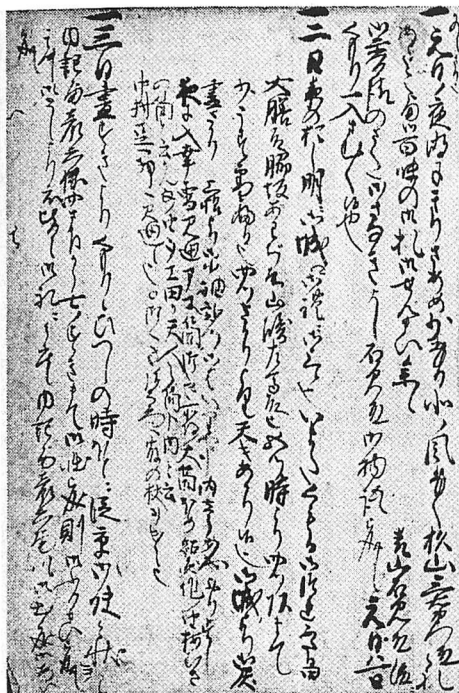
合戦後、延俊は石田方の残党小野木縫之助の福知山城を攻  
略して手柄を上げ、慶長六年四月、細川忠興の領分だった  
速見郡日出三万石の城主に封じられました。この背後には  
家康の信頼の厚い義兄忠興の援助が大きかったと云えます。

陽谷城ようたけじょうの築城にも忠興のバックアップがありました。木下  
氏が細川忠興との関係から、木付の城主松井康之やその子の  
長岡（松井）興長は昵懇じつこんの仲であった事は言うまでもありま  
せん。

延俊が京都で召し抱えた無二と称する兵法者は、武蔵の義  
父の宮本（新免）無二之助だと云われています。

#### 二、延俊と宮本無二齋の出会い

「慶長十八年（延俊）日次記」ひなみきは、延俊が江戸から日出に  
帰る途中、京都での出来事を抄出します。



慶長十八年日次記 一月正月

延俊は、二月四日江戸を立ち同九日駿府で家康に謁見し、二月二十日、京都二条に着きました。京都では叔母の高台院（おね）や母の雲照院に面会しました。また、ひそかに大阪城を尋ねて「大坂様」秀頼にも面会しています。

延俊は、京都で意外な人物に出会います。

五月一日、「朝五つ時分より雨はるゝ也 四つ時分無二参り候て御対面成され候」

三日、「天キ一段よく也 四つ時分やしの肥前参り候

其後伯耆御見廻申し上げ候 無二参り夕たたべ罷り帰り候」

五日、「天きよく候也 五つ時無二給知御礼ニ参られ候無二御帷子式つ遣はされ候」

五月一日に無二という兵法者が現れ、延俊の気に入られたのでしよう、五日には知行を与えられ召し抱えられています。無二は京都で兵法者として著名だったのでしよう。

延俊は三七歳、武芸を好み自ら嗜む戦国武将でしたから、日出に帰藩した後も御伽衆として常にそばに置き、時には「無二兵法遣ひ申し候（七月）」「無二ト兵法を遣ひ候（九月）」と延俊自から無二と立ち合っています。

慶長十八年の日次記のみしか残っていませんから、その後

の消息は、後で述べる「沼田家記」や「二天記」まで眼にする事が出来ません。

無二が日出藩に滞在したことは、日出藩家老菅沼政常が宝暦元年十二月に書いた『平姓杉原氏御系図附言』の延俊公の項に、「劍術は官本無二斎の流派を伝へたまふ。無二斎の免許の巻物今以之有」とあることで証明されます。この無二斎と日次記の無二と同一人物でしょう。

延俊は八月に無二を伴って数日間入湯に來ています。別府村の惣庄屋堀宅に逗留したと思います。

この日次記で延俊と無二の邂逅について想像できることは、石垣原の合戦（後述）に加わった無二は、後に黒田家を離れて京都に滞在していたところ、延俊に認められて召し抱えられたこととなります。いっぽう武蔵も合戦以後は無二と同様黒田家を離れ、諸国漫遊の途にあつたのでしよう。

慶長十四年小倉に現れて船島（岩流島）で佐々木小次郎と対決するまで吉川英治の「官本武蔵」によると、京都で吉岡一門、奈良で槍の宝蔵院流を、さらに、伊賀で鎖鎌の六戸、江戸で夢想流棒術の権之助、柳生流の大瀬戸某と辻風某を倒して名声を高めています。

### 三、武蔵父子の石垣原合戦

慶長五年、吉川英治の『宮本武蔵』では、武蔵は西軍に加わって関ヶ原で合戦に参加しています。

はじめに触れたように、武蔵について信頼できる史料や古記録は極めて少なく、記録書の多くは死後しばらくして書かれたもので、剣豪武蔵として誇張や逸話のたぐいが多く、客観的に真実と判断される史料にはなかなか出会いません。

一例をあげると、武蔵の出生地は作州讚甘村説（岡山県英田郡大原町宮本）、播州宮本説（兵庫県揖保郡太子町宮本）、播州高砂説（兵庫県高砂市米田）があります。大河ドラマでは高砂市と大原町の双方を執って出生地は高砂市、大原町の宮本無二齋（無二之助）の許へ養子にやられたことにしたそうです。

ところで、関ヶ原合戦に宮本親子は作州の新免家に仕えて、宇喜多勢に加わり西軍に組して戦った、と云うのが通説のようです。吉川英治も西軍への参加説をとっています。

ところが、黒田家に従って東軍についたという異説があります。黒田家の分限帳（慶長年間）の「古譜代」の項に「新免無二」の名があるからです。

黒田家では天正八年（一五八〇）播州（山崎城一萬石の城

主）以来の家臣を「大譜代」、九州平定から関ヶ原までの中津時代に家臣になった家来を「古譜代」、関ヶ原合戦以後に家臣になった者を「新参」と呼んでいるそうです。

「古譜代」に名を連ねる無二は、関ヶ原合戦以前に主家の新免家を離れて、黒田家の家臣になっていたことになり（弁之助は十六歳）。因みに、新免家の当主宗貫は関ヶ原の合戦で敗退後に黒田家を頼って家臣団に組み込まれたらしく「新参」と書かれているそうです。

前に述べたように、慶長五年九月、関ヶ原合戦に黒田家は当主の長政が主力を率いて参戦していますが、豊後では父の如水が木付城主松井康之の援軍として石垣原に出陣します。

黒田孝高（如水）が中津から石垣原に至るまでの足取りを辿りますと、九月九日、大友義統が別府の立石村に着陣した知らせを受けて、中津城を出陣しました。翌十日、高田城の竹中重孝を下して、箕家純の富来城を攻めました。富来城は五百余の城兵が籠城して抵抗しました。

『丹治峰均筆記』によると、無二之助と弁之助父子は、黒田兵庫政成の配下で富来城攻めに参加したと書いています。

十日夜、如水は木付城の松井氏を吉弘統幸らが攻撃中との知らせを聞いて、急遽、主力の井上九郎右衛門らを救援に向

かわせ、富来城、安岐城の攻略を後回しにして、十三日の夜、実相寺山頂に到着しました。時すでに、石垣原の合戦は松井・黒田軍の勝利にきしていました。

弁之助（武蔵）は石垣原の合戦の攻防に直接参加できませんでしたが、黒田勢に従って実相寺に来たこととなります。このことについては『丹治峰均筆記』に、

「無二之助は黒田<sup>※</sup>兵庫殿の与力也」とか、「如水公東軍に味方として中津川の御居城を御発騎有りて、石垣原にて大友義統を擒<sup>とら</sup>にせられ安岐、富来の二城を責破<sup>せぶ</sup>り玉ふ」

「御出陣前弁之助中津へ下り父が勘気をも赦免し親子一所にあり…」

と書いています。また、同書には弁之助の逸話として

「武蔵は富来城を攻めたとき、敵の槍に太ももを刺されても平然と敵の槍を折り、切り立った竹藪に飛び降り、脚を怪我したと云った…」と書かれています。

宮本父子は慶長五年九月には豊後にいたこととなります。石垣原合戦後の宮本父子の消息を伝える史料はありません。

※「新免無二」（無二之助）永禄年間、將軍義昭の御前試合で吉岡憲法に勝ち、主君の新免宗貫から新免姓を名乗

ることを許された。武蔵の義父（実父の説もある）

※「丹治峰均筆記」享保十二年（一七二七）、別名「兵法大祖武州玄信公伝来」、黒田家藩士で二天一流五代の立花峰均が書いた武蔵の伝記。五輪書を授けられた寺尾孫之助（二代）の弟子芝任美矩（三代）とその弟子吉岡実連（四代）の夜話を聞き書きした伝記で、二天記（一七五五）より二八年早い。誇張もあるが後半については信憑性が高いと云われる。

※「黒田兵庫」は黒田兵庫助利高のこと、利高は慶長元年に没しているが、その子政成が石垣原合戦に参戦しているので、無二はその配下だったのであろう。

#### 四、船島の決闘

本稿の無二に関りがある<sup>かわ</sup>ので、少し長いですが船島の決闘前後について書かれています。史料を上げておきます。

※「二天記（一七五五）」に、

「…時に慶長十四年四月 武蔵都より小倉に来る二九歳なり 長岡佐渡興長主の第（邸）に至る 興長主は其父無二之助の門人なり 其故に因みて来るなり」

とあるように、武蔵は小倉藩細川家への仕官を望んで、父無

二の知己を頼り長岡興長を尋ねたとされています。

「沼田家記（一六八九）」には、

「…延元様（忠興家老で門司城主）門司に御座なされ候時 或る年宮本武藏玄信豊前へ罷り越し二刀兵法の師を仕り候 其の頃小次郎と申す者岩流の兵法仕り 是も師を仕り候 双方の弟子ども兵法の優劣を申し立て…」

と、武蔵が豊前で二刀流の師範をしていたと書いています。何れにしても、武蔵は小倉細川藩への仕官を望み、岩流佐々木小次郎と競う運命にあったのだと思います。

「…（武蔵は）嘗て興長主に請て曰く 岩流小次郎今この地に留まりぬ其の術奇なりと承る 希くば吾手技を比べん 公は無二が故有りて憑み奉る者なり 興長主応諾ありて 武蔵を留めて忠興公御聞きに達し その日を定め …此度



双方勝負の最中および遊観を禁止あり …小次郎は忠興公の船にて差し越さるべし 武蔵は興長船にて渡さるべきなり …「二天記」

と、武蔵は興長に小次郎との果し合いを申し出ています。興長は忠興の承諾を得て試合の段取を決めています。

武蔵側の記録には、小次郎が大勢の弟子を従えて横暴な振る舞いがあると伝えられますが、双方の仕官をめぐつて藩主忠興と長岡佐渡興長との間で齟齬があつたとの説もあります。果し合いの結末について「沼田家記」に意外な記録があります。

「…武蔵・小次郎兵法の仕相仕り候に相究 豊前と長門の間ひく島に出合い 双方ともに弟子一人も参らず筈に相定め試合を仕り候処 小次郎打ち殺され候 小次郎は兼の如く 弟子一人も参らず候 武蔵弟子共参り隠れ居り申し候 其の後に 小次郎蘇生致し候得共 彼（武蔵）の弟子共参り合い後にて打ち殺し申し候 此の段小倉へ相聞こへ 小次郎弟子ども一味致し 是非とも武蔵を打ち果すと大勢彼の島へ参り申し候」と「沼田家記」は剣聖武蔵らしからぬ結末を書き記しています。

同じく小次郎の最期について、武蔵側の「二天記」では「…小次郎が脇腹横骨を撃折て即ち気絶す 口鼻より血流し出す 暫くありて武蔵木刀を捨て小手を小次郎が口鼻に覆い顔を寄せて死活を窺ふ事稍暫なり 而して后遙かに検視に向いて一礼し 起て木刀を把り本の船に行き飛乗自らも共に棹さして行くこと速かなり 下ノ関に帰り興長主に書を呈して礼謝す」

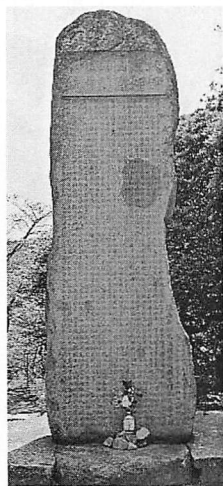
また、養子の伊織が武蔵の死後九年目に手向山に建立した、手向山武蔵顕彰碑（小倉碑文）では、

「…両雄時を同じうして相会す 岩流は三尺の白刃を手にし来たり 命を顧みずして術を尽くす 武蔵は木刀の一撃を以てこれを殺すこと電光すらなお遅きがごとし…」

と、書かれています。武蔵側の「二天記」・「小倉碑文」いずれも、武蔵の剣士としての礼節と鋭い剣法を簡潔に表しています。

また、「丹治峰均筆記」では、

「…血も少しは流れしを下着の襟を出し疵を隠



されたりとかや さて見物の貴賤小次郎が死骸に近み見るにはや息も絶々なり 見物の内より『弁之助ははや立ちのくか 小次郎もはや是までか』と詞をかけしに両眼をはつと見ひらき ふつと立ち揚がり『水一つくれよ やることではなき』と一声さけんで前へかくはと転て息絶えた り 古今の英雄と云うべし 可惜 可憐」

と、二天一流の剣法を継ぐ者の伝記では、敵小次郎に「古今の英雄」と賛辞を与えています。

これらとは全く異なった著述ですが、「沼田家記」が客観的に見て史実を伝えたものと思います。

「沼田家記」は、門司城代の延元が書き残した記録を武蔵没六五年後の元禄二年（一六八九）にまとめた書で、武蔵関係の文書としては、倅の伊織が武蔵没九年後の承応三年（一六五四）に建てた小倉碑文に次いで古い記録です。

※「二天記」宝暦五年（一七五五） 豊田正剛が記録したものを、子の正修が加筆して『武公伝』としてきたものを、孫の景英が更に加筆してまとめた書。現在信憑性はやや疑われている。

※「沼田家記」元禄二年（一六八九） 細川藩家老で、門司城の城代だった沼田延元が書き残した記録を、子孫が



改めて記録としてまとめたものである。決闘の目撃者の記録で信憑性が高いと云われている。

## 五、佐々木小次郎のこと

小次郎方一門が激昂しているのを知った武蔵は、「依これより之武蔵難を遁れ門司に遁げ来たり 延元様を偏に願こたへい奉り候に付き御請合な成され 即ち城中へ召し置かれ候に付き武蔵無つがな悉運を開き申し候 其の後武蔵を豊後へ送り遣わされ候 石井三之丞と申す者馬乗に鉄炮の者ども御附け成され 道を警護致し別条無く豊後へ送り届け 武蔵を無二齋と申す者に相渡し申し候由に御座候……」(沼田家記)と沼田延元が、武蔵を匿かくまい鉄砲隊の護衛まで付けて豊後にいる無二の許に逃がしたと伝えています。敢えて武蔵に不利になる記述することは、当事者の客観的な情勢の記録として真実を語るものと思われまます。

当時は徳川と豊臣の対立が先鋭化して、慶長十九年には大坂で冬の陣が起るといふ緊迫した時代です。藩主が拘かかわって決闘・殺人事件に現まを抜かず悠長な世の中ではなかつた筈です。その上、長岡興長の父松井康之がこの年の一月に逝去して興長は喪に服していた筈です。敢えて両者を戦わせる必然

的な理由があつたのでしょうか。

しかも、船島ふねしまという隔離された無人の孤島を決闘の場所に選えらび、「沼田家記」にあるように、島には関係者以外の立ち入りを一切排除したと書かれています。つまり、藩のお歴々のみ立ち会う中で小次郎の虐殺が黙認されたとすれば大いに疑問が残ります。

沼田氏は、劍豪とはいえ一介の浪人に何故鉄砲隊の護衛をつけて豊後の無二齋の許に逃がしたのでしょう。

それにしても、宮本武蔵と佐々木小次郎の決闘の背景に何があつたのでしょうか。仮に小次郎を排除する理由があつたとすれば、藩主の権限で切り捨てるなどして亡き者にできる筈です。ここまでお膳立てする事情があつたのでしょうか。

延元が、激昂する小次郎の弟子達から武蔵を門司城に庇護し、鉄砲衆まで添えて過剰といえる警護をつけねばならぬ程の勢力を持った佐々木一門の後ろ盾には何があつたのか。

秀頼が大坂城を居城としている限りでは豊臣などの旧勢力は根絶できず、徳川の幕藩体制は完成しません。同じように新しく知行地を貰つた領主達も在地勢力や農民の抵抗にあつて統制に苦慮していた時代です。

細川氏は慶長六年(一六〇一)、筑前に転封した黒田氏の

跡に豊前に入部しました。

当時、豊前では、鎌倉時代に田川郡副田庄そえだの地頭に補任された佐々木氏が英彦山ひこさんの岩石城を本拠として、修験道の求菩提くへつ・英彦山ひこさんの勢力を配下におさめる強力な在地豪族でした。小次郎の岩流の流儀は岩石城に因んだ流派だとされています。豊前に入部した細川氏は地元の勢力、特に求菩提・英彦山の勢力を手中に収めるため、佐々木一族の頭領小次郎の懐柔かいじゆうをはかったと考えられます。

在地勢力をかさにきて増長の振る舞いが多い佐々木小次郎は、藩主にとって獅子身中の虫だった筈です。

「二天記」では決闘の時、小次郎は十八歳とされています。しかし、一八歳の小次郎が佐々木氏の当主として藩主を悩ます権勢を握るには若すぎます。一説のように、小次郎が中条流の富田勢源に弟子入りしたとすれば年令的には最低でも五十歳以上、仮に勢源の弟子鐘巻自斉の門下に入ったとしても、不惑の歳は越えていたと云われます。この歳であれば佐々木一門の首魁小次郎が、在地勢力を背景に権勢を揮ふるつていたことは充分に考えられます。因みに武蔵は天正一二年の出生と云われるから、慶長一七年は二九歳になります。日出藩主木下家に寄留していた無二は、小倉藩の苦衷くちゆうを聞き、

武蔵を剣術師範として小倉の興長の許に送り込み、試合にかこつけて小次郎を排除する策謀があつたのではないのでしょうか。

決闘は剣術指南をめぐって佐々木小次郎と宮本武蔵の優劣を決する藩主公認の果たし合いという名目で行われましたが、小次郎を誅殺することが目的であれば、隔離された場所で部外秘の限られた立会衆のもとで催されなければなりません。仮に武蔵が敗れても小次郎は命を落とす運命だったのでしょう。

#### 六、「船島の決闘」はいつ？

「沼田家記」後半には、武蔵を豊後の無二斎の処に逃がした。というくだりがあります。果たして無二斎が豊後にいたかどうか。其の年代に疑問が生じます。

「慶長一八年日次記」が正しい史料とされるならば、延俊は慶長一八年五月京都で無二に面会して召し抱えたことになっています。船島で決闘があつたとされる慶長十七年の前のこと、延俊は江戸在府中でまだ無二に逢っていませんから、延俊も無二斎は日出にも杵築にも存在しません。

「二天記」は、長岡興長が「其（武蔵）父無二之助門人な

り 其故に因みて来るなり」と書いてありますが、武蔵が興長のもとに来たのは無二を介して知己であると書いていますが、必ずしも慶長十七年に父無二が杵築に滞在しているとは書いていません。

「沼田家記」には決闘の年月日は書かれていません。「二天記」には「慶長一七年四月一三日とある」と伝聞として客観的に書かれ、「丹治峰均筆記」に至っては『武蔵一九歳』とあるのみで、いずれも歴史的に正確な年月は書かれていませんし、勿論「日次記」には「船島の決闘」は書かれていません。

無二に関する「慶長十八年日次記」と「沼田家記」を正しい史料と据える場合、無二斎が豊後（日出か杵築）に到着したのが「日次記」では慶長十八年以降であり、「家記」にあるように決闘後、即日武蔵を豊後の無二之助の許に送り届けたとすると、「船島の決闘」を慶長一七年とするには無理が生じます。

武蔵は慶長二十年大坂夏の陣に小笠原家客分として大坂城にいたと云われていますし、また「水野勝成大坂御陣人数附覚」（福山城鏡槽文書）には攻城軍の水野勝成配下に宮本武蔵という人物が加っていたと書かれています。

慶長十七年四月一三日（二天記）の決闘の時期は諸説あつ

て実際は不明のようです。決闘が歴史フィクションでない限り、時空の矛盾を満足するような史料は、無二が日出に到着した「日次記」の慶長一八年七月と後の御陣人数附覚にある夏の陣の慶長二十年五月の約二年の間の出来事ではないかと思えます。

少なくとも、無二斎と武蔵が石垣原合戦に参戦したこと、宮本無二斎が慶長一八年七月に日出城下に到着した以降は、期間は不明ですが日出藩か杵築に滞在したこと、そして武蔵が決闘後に小倉を逃れて杵築か日出に逃れて来たことは史実であると思えます。

完

参考文献「慶長十八年延俊日次記」「沼田家記」「小倉碑文」

「丹治峰均筆記（兵法大祖武州玄信伝来）」「二天記」

「武蔵年表」「吉川法一郎氏講演資料」

「異説 巖流島（吉村豊雄）」

#### 「沼田家記」

延元様門司に被成御座候時 或年宮本武蔵玄信豊前へ

罷越まかりこし二刀兵法の師を仕候つかまつり 其比そのころ小次郎と申者岩流の兵法を仕是も師を仕候 双方の弟子ども兵法の勝劣を申立  
武蔵小次郎兵法の仕相仕候しあひに相究あいまめ 豊前と長門の間ひく島に出合 双方共に弟子一人も不参まいらず筈に相定 試合を仕候処  
小次郎被打殺候 小次郎は如兼かたせのごとく弟子一人も不参候  
武蔵弟子共参り隠れ居申候 其後に小次郎蘇生致候得共そせいいたしうらえども  
彼弟子共参合後にて打殺申候 此段小倉へ相聞あいきこえへ小次郎弟子ども致一味いちみいたし 是非とも武蔵を打果うちはたさんとと大勢彼島へ参申候 依之武蔵難遁これより門司に遁来 延元様を偏ひとえに奉願候に付御請合被成なされ 則城中へ被召置候すなはちに付武蔵無恙運を開申候 其後武蔵を豊後へ被送遣候めしおかれ 石井三之丞と申馬乗に鉄砲の共ども御附被成おくりつかわれ 道を致警護無別条豊後へ送届べつじょうなく  
武蔵無二斎と申者に相渡申候由に御座候あいわたし